

C O R R E N T E

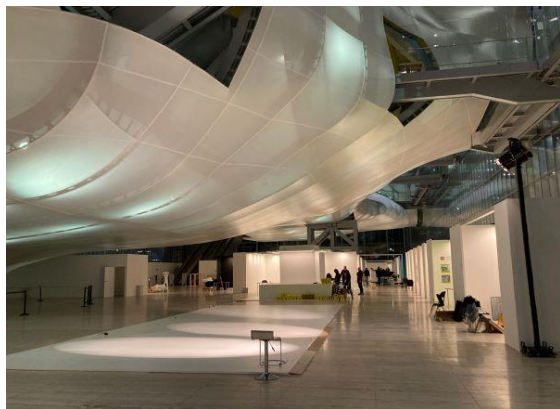
Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマと美術 ③

浅田 朋子

イタリアではここ2年ほど、コロナウイルス感染拡大による影響で、大規模なアートフェアや展覧会が中止や延期になっていた。

しかしコロナワクチン接種の普及に伴い、規制されていた屋内での大規模なイベントも開催されるようになり、ローマでは11月、久々に大規模な現代・近代美術アートフェア“ROMA ARTE IN NUVOLA”が開催された。



【NUVOLA 内部 — 搬入設営日】

会場はコロナワクチンの大規模接種会場となっていたローマのエウロ地区にあるローマコンベンションセンター“LA NUVOLA”（ラ・ヌーヴォーラ）である。近代的で独創的な建物はイタリアの著名建築家マッシミリアーノ・フクサス（Massimiliano Fuksas）によって設計された。雲が建物内に浮か

んでいるようなデザインはとても美しい。

夫はローマで画廊を営んでいるので、この大規模なアートフェアに興味津々であった。しかし参加はもちろん「有料」。通常アートフェアでは参加を希望する画廊が主催者側に展示場所代を支払って参加できる。展示場所の坪数が大きく、集客しやすい場所はもちろん値段も上がる。良い場所は何百万というお金を払うらしい。車買えるやん・・と私なら思ってしまうが、アートフェアは作品を売る取引の場でもあるので、儲けを見越して大きな画廊はそんな大金もポンと払うのである。参加を諦めていた夫であったが、ラツィオ州が買い取った場所を4ブースに分け応募してきた画廊に無料で貸し出すという枠に応募したところ、奇跡的に当選した。なんという幸運・・。

選ばれるなどと全く考えてなかった私は、7歳になった双子の娘たちと「一緒にフェア、見に行こうね」なんて他人事で呑気にしていたのに、突然のフェア参加決定で忙しくなってしまった。しかも参加が決まったのは、搬入・設営日の1週間前・・。その上、イタリアは「土日は機能しない」ので実質5日しかない。「準備って、そんなん、絵を掛けるだけやん！」と思われるかもしれないが、イベントでは搬入や作品を展示する場所、パネルの仕様も様々で細かなルールがあり、それに合わせて展示用の道具・土台等を揃えないといけない。また、「販売」が目的なので、アーティストのカタログ

や、この展示に合わせたパンフレットや資料なんかも用意しないとイケない。画廊の裏方仕事はほぼ私が担当しており、鬼のような忙しさになることは目に見えていたので、すぐさま義母に連絡し「双子、預かって…」と SOS を出した。義父母は「もちろん、いいよー！」と即答してくれた。本当にありがたい。双子に「ママ、ちょっとお仕事忙しくなるから、明日からおばあちゃん家にお泊まりでいいかな？」と言うと「わーい！！ ママ、仕事頑張ってるね！ 私たち、大丈夫！」と元気いっぱい、笑顔でサヨナラされた。… ちょっと複雑な気持ちである。



【NUVOLA 外観】

双子を送り出した後は猛烈に準備をした。「自分があと二人欲しい…アシスタント！ アシスタントをくれ！！」と久々に日本で働いていた時の感覚を思い出した。木材店に展示用の土台を頼むと1週間かかると言われ「そんなんフェア終わってるわ！！日本やったら土日でも出勤してやるで！」と脅し、泣き言を言う印刷屋には「今日中に印刷すれば、冊子にできる、できるって！」と励まし、どうにか搬入日に全てを間に合わせる事ができた。

搬入・展示作業は1日半、開催初日の午前中はプレス関係(記者・美術関係者)、午後から一般公開で合計4日間、フェアが開催される。

準備は大変だったが、搬入と展示はスムーズにできた。会場の設営は整然と美しく、ヌーヴォラの雰囲気を壊さないシンプルでミニマムなデザインで統一されていた。しかし搬入口の場所や時間が違っていたり、展示パネルの図面を送ってきた

にも関わらず、作品を掛けるビスをつける場所に木材の骨組みが入っていなかったりと、イタリアらしく「計画はしたけどその通りにならなかったんだよねー」という曖昧さで溢れていた。しかしそんな曖昧さを全てカバーするくらい、開催側のスタッフの現場対応は迅速で素晴らしかった。

展示作業を終え、時間の余裕ができた私たちは、フェアが始まるとブースを離れることができないので、この時間を利用して会場内を見て回った。

展示会場のレイアウトは、一階が ARTE CONTEMPORANEA (現代美術)、地下一階が ATRE MODERNA (近代美術)になっている。地下一階はブースも大きく有名な画廊ばかりで、展示されている作品も美術の教科書にのっているような作家のものである。私たちコンテンポラリーアート会場とは全く雰囲気の違い「とてもお高いですよ！！」という雰囲気に圧倒される。スーツを着た紳士が白の手袋をはめ、シルバーの彫刻を黙々と磨き上げている。商談用のテーブルセットもデザイナーもので「あのイス、うちの作品より高いと思うよ…」と夫が笑っていた。

コンテンポラリーアート会場に戻り、顔見知りの画廊に挨拶に回った。オーナーやスタッフの人たちとの情報交換やアドバイスは私たちのような若い画廊にはとても勉強になる。

親がお金持ちで息子が趣味がてら経営している画廊にも乗り気はしないがとりあえず挨拶に行ったが、相変わらず道楽息子はチャラチャラ喋っていて本当に胡散臭い。「道楽息子、相変わらず感じ悪いな～」と夫のため息をついた。アーティストの作品は自分たちの画廊をカッコよく見せる装飾品程度にしか思っていないのだろうと思う。

ミラノから参加した有名画廊を訪ねると、画廊スタッフのお兄さんがいた。髪の毛はクルクルで9:11に分けられ、黒縁のメガネをかけ、細身のスーツのズボンも短く、個性的なブーツを履いている。フェア期間中私たちは彼のことを「おしゃれな美術オタク」と呼んでいた。ミラノ・アクセントの喋り方が彼の雰囲気にぴったりあっていて、ストーリーが全くわからないアンダーグラウンド映画に出てきそうである。先ほどの道楽息子とは違い、ものすごい情熱で作品を丁寧に説明してくれる。メイ

ンで展示されていない、裏にひっそりと飾られた作品を夫が褒めると、「でしょう、いいでしょう！！これはですね、わかる人はわかるんですよ！嬉しいです！いいでしょう！？これは彼の初期の作品であまり知られていませんが、(長いので割愛)」と大興奮で夫と喋り始めた。

そして最後は、夫の好きな彫刻家の作品を展示している、私たちのブースの斜め向かいの画廊を見に行った。

オーナーは50歳くらいで、カッコよくスーツを着こなした、ブルース・ウィルス似のなかなかの男前である。美術や経営に関して色々喋ったが、知識も経験も豊富で「できる男」といった感じだ。自信満々な高飛車な態度も納得がいく。ブースにはスタッフの女子が4名もいる。皆モデル並みに美しく、女の私でさえどうしても胸元に目がいつてしまうようなピッチピチの黒のスーツを着ている。モデル立ちした美女と自信満々の笑みのブルースに見送られ、自分たちのブースに戻った後、「ああいう戦略やるな～。怖いわー！ お金持ちのおじいちゃんなんかイチコロやで。絶対あの高額の絵を買わされる…！」と震えた。

しかし翌日、それは間違っていたとわかったのである。

人もまばらな開場してすぐの10時ごろ、私たちのブースの裏手にブルースがスタッフの美人女子一名を連れて何やらヒソヒソと話しているのがある。見ると美人女子は泣いている。「ちょっと、ちょっと、来て来て！」と夫を呼び出し二人で聞き耳を立てる。ブルースは「君は一スタッフで、ここは家のベッドじゃないんだ！ちゃんとプロフェッショナルな態度で仕事してくれないとダメだ！」と怒っている。しかし女子がさらに激しく泣き出すと、最後は「ほら、泣かないで…。バールでコーヒーでも飲もう」となだめてキスしているのである。彼らがバールに行った後、夫と二人で唸った。「あの女子たちは自分のためだったか！あっぱれ！」。イタリア男は他人のために美しい女子をお膳立てすることはないのである。

毎日、閉場近くになるとブルースは美人スタッフを連れ、会場内のバールで優雅にプロセッコを飲んでいる。「私もプロセッコ飲みたいなあ…」と夫をちらりと見て眩くと、「僕の方も買って来てくれ

る？」とプロセッコを買いに行かされた。

今回のアートフェアへの参加は、会場を訪れた人々との新しい出会い、そして美術関係者と交流を深める素晴らしい機会を与えてくれた。

芸術、演劇、映画、スポーツ観戦、旅行…。コロナ禍で娯楽と言われる分野はすぐに制限がかかり押しやられたが、これらは生活に変化を与え、人生を豊かにしてくれるものである。

感染拡大防止で人との交流も抑えられてきたが、やはり人との出会いや触れ合いは必要なもので、それを何かで代用することはできない。イタリアでアートフェアをオンラインで行う試みをしたが、結果は良くなかった。実際に絵画を見る、説明を聞く、会場の雰囲気、たくさんの人との交流、そういう全てを実際に体験することが人間には必要なのだ。

2年も続く行動規制やグリーンパス(コロナワクチン接種証明書)による監視に慣れてしまっているが、制限なく自由に行動し交流できた以前の世界に戻していくことを考えていかなければいけないのではないかと思う。もちろん、まだまだ時間がかかることではあるが、元の生活に戻る希望を失わないようにしたい。



【NUVOLA 内に展示されている模型】

(元当館語学受講生)

コロナ禍二年目のイタリアより

深草 真由子

このところ、わたしはどうも時間の感覚を失ってしまっている。パンデミックがはじまってから、それ以前にもまして、時が猛スピードで流れていく気がするのだ。イタリア全土封鎖を告げる、あの衝撃的な首相会見をテレビで見たのが本当についてこのあいだのことのよう。心待ちにするような楽しみも少なくなり、おなじような日課をこなす、変わりばえのしない毎日を過ごしているから(これができること自体はたいへんありがたいことなのだけれど)、時間の流れはむしろ遅く感じるのではないのかと思うのだが、どうやらそうではないらしい。

そういうわけで自分でもときどき分からなくなるのだが、わたしがコロナについてコレンテに書くのはこれで二回目なのだ。前は、春のはじめに突然ロックダウンになって、その結果いくぶん状況が落ちついて、なんとか一息つける夏があり、あたらしい年度がはじまって、ふたたび感染が拡大していた2020年の秋から冬にかけてのこと。第二波の真ただ中だった。わたしの住むカラブリア州のコゼンツァという町にも「野戦病院」がつけられたので、イタリア軍がそれを運営しているようすを恐る恐る見に行ったことを覚えている。そのあとワクチン接種がはじまって、第三波が襲ってきては去り、この原稿を書いている今、2021年の12月、オミクロン株が世界を揺るがしている。パンデミックがはじまって二回目のクリスマスが目の前に迫っている。

*

一回目のクリスマスをふり返ってみれば、これはもう、なにもかもが普通ではなかったとしか言いようがない。この時期にもっともぎわうはずのレストランやパールはテイクアウトのみの営業だ

ったし、チネパネットーネ(映画「チネマ」とクリスマスに食べるパンケーキ「パネットーネ」をくっつけた造語で、年末年始に上映されるコメディ映画)を見るために、多くの人たちが押しよせるはずの映画館も閉まっていた。とりわけイブの晩からクリスマスの当日、そしてその翌日の聖ステファノの祝日、それから大みそかとお正月は規制が厳しく、何時から何時までのあいだに何人の人と会うことができるか、一日に何回どれだけの範囲を移動することができるか、ということまでもがこまごまと決められていた。



【屋内では常にマスク着用の義務】

これではみんなが一つのテーブルにつどい、お義母さんが何日もかけて作ってくれたごちそうを満腹になるまで食べる、あのいつものにぎやかなクリスマスはお預けだ。家にこもっているしかなかった。人に会わないわけだから、プレゼントを買い求めに町に出ることもなかったし、イルミネーションも見なかった。美味しいものを食べた記憶もとくにない。「せめてなにか一つくらいはクリスマスらしいものを」と、近くの園芸店で小さなモミの木を購入した。心がはずんだのはそれにオーナメントを付けているときくらいで、これといって思い

出にのこるようなことはなにもない冬休みだった。状況が状況であるだけに、こればかりはどうしようもない。今は誰もかれもがなにかをあきらめたり、我慢したりしているのだから……。

(と思っていたのだが、実際のところは、政府の定めた規制を無視して、親せきや友だち同士であつまって盛大にパーティをやっていた人が、わたしのまわりには少なからずいた。守らなければ罰金、なのだが、見つからなければ大丈夫、でもあるのだ。なかには「見つかっても罰金払えば済む話でしょ」なんて言っていた人もいるくらいだし……)



【ワクチン接種会場で順番を待つマッタレラ大統領】

出典元:<https://www.quirinale.it/>

ヨーロッパでワクチン接種がはじまったのは、そんなクリスマス休暇の最中だった。イタリアの第一号はローマの国立感染症病院ではたらく看護師さんだった。それまで感染のリスクに日々さらされてきた人であるだけに、この日が来るのを待ちに待っていたのだろう。注射針に腕を差しだす彼女の目がうるんでいるようにみえた。

親切にも接種券がうちに郵送されてくる日本とはちがいで、イタリアでは自分が接種対象に入っているかどうか、自分で情報収集しなければならない。入っていれば、保健省のホームページにアクセスして、予約をいれる。

わたしにワクチンの順番がまわってきたのは初夏だった。一回目は問題なく済ませたのだが、二回目は予定通りにいかなかった。まぶたにできたヘルペスが治るまで、接種を待たなくてはならなかったのだ。はじめ、ムカデにでもかまれたのだ

ろうと思い、さほど気にせず放っていて、すぐに薬をのみはじめなかったためか、完治するまでにやたらと時間がかかってしまった。

ワクチン二回目の予定日はもうとっくに過ぎている。ホームページでは予約の変更はできないみたいだし、オペレーションセンターに電話をしてもつながる気配がまったくない。「どうしよう?」と、ヘルペスを診てもらっていた(なぜかいつもノーマスクだった)ホームドクターに相談した。すると、この先生はワクチンの打ち手でもあったので「大丈夫。会場についたらわたしに電話しなさい。予約なしでも、わたしが特別に打ってあげるから」と便宜を図ってくれた。たいへん助かったのだが、問診のときに「あれ?あんな、一回目モデルナだったの?朝一番はファイザーしかないから、ファイザーでいいね?」と言われ、ちょっと冷や汗をかかされた。

*

8月にはグリーンパスとよばれる証明書が導入された。ワクチンを接種するとスマホにドキュメントが送られてくる。それを大勢の人が集まる施設に入るときなどに提示しなければならないのだ。秋にはそのシステムがさらに強化されて、職場でもパスが必要とされるようになった。世界的に見てもこれはかなり厳しい措置なのだそう。ただし、ワクチンを接種するつもりのない人にも一応「抜け道」があって、薬局で簡易検査をして陰性であれば、二日間有効のグリーンパスがもらえることになっている。検査のたびにお金が飛んでいくけれども。

グリーンパスのチェックは徹底されているか、と尋ねられれば、実はそうでもないと言うしかない。わたしが通っているジムでは、みな顔見知りだからか、これまで一度たりとも提示を求められたことがない。レストランだと、十軒に一軒くらいはノーチェックのところがあるように思う。実際、客一人一人のコードを確認しに回らなければいけない方の労力も相当なものだろう。

そうした手間を省くため、わたしの知る大学は独自にアプリケーションを開発し、それによって学生たちの教室への出入りを管理している。これがあると、教官が出席者全員のパスをいちいちチェックする必要もないし、キャンパス内で感染者が

でた場合には、濃厚接触者の発見もたやすくなる。



【どこに行くときにも必要なグリーンパス】

ワクチン接種自体は(少なくとも今はまだ、病院や介護施設、学校ではたらく人をのぞいて)義務ではないのだが、ワクチンを受けて入手するグリーンパスは、もはや生活に欠かせないものになってしまっている。ワクチンを回避しつつけている人がわたしの知り合いにもチラホラいるけれど、彼らはパスなしでどうしているのだろう。

イタリア各地の広場ではもう何カ月も前から、反グリーンパスのデモが行われている。ごくふつうの平和的な抗議行動の場合もあれば、警察と派手に衝突したり、逮捕者がでたりしてニュースになることもある。なかでも一番ショッキングだったのは、10月にローマのポポロ広場で行われたデモだ。数千人があつまった大規模なものであったが、その途中でフォルツァ・ヌオーヴァという極右政党のリーダーが演壇にのぼり、デモの参加者らをあおって、イタリア労働総同盟の本部を襲撃するという暴挙にでたのだった。労働総同盟はグリーンパスの導入に賛成していただけではなく、ワクチン接種の義務化も求めていたからだろう。

*

さあ、冬のヴァカンスがやってくる。今年はミラノ・スカラ座のシーズンも満員御礼で無事に開幕したことだし、「やれやれ、ようやくひと段落かな」と思っていたのだけれども、ここにきてどうも雲行きがあやしい。新規感染者数も死者数も重症者数も日に日に増え、大みそかの年越しコンサートをキャンセルする自治体も出てきている。それでも

今年は昨年とはちがって、親しい人とご飯を食べに行ったりイタリア国内を旅行したりという、プライベートのささやかな楽しみを制限されるようなことには多分ならないんじゃないか(グリーンパスをもっていれば、の話だが……)。お祝いごとがひと通りすんで、仕事や学校がはじまるころに、またロックダウン、なんてことになるかもしれないけれど。



【クリスマス前の買い物客でにぎわう街のメインストリート】

コロナ禍二年目のクリスマス。わたしは語学学校でいっしょにイタリア語を勉強し、今年の春にコロナに感染して亡くなったメキシコの知人のために祈りたいと思う。2022年はどんな一年になるのだろう。

(元当館スタッフ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>